

## 特集

## 黄斑上膜の最新情報

## 序 論

門之園一明\*

黄斑上膜という疾患名は、黄斑前膜としばしば混同されることがあります。黄斑前膜という呼称が広く使用されていたからです。これは、1980年代、欧米の表記が pre-retinal membrane だったからに他なりません。しかし、その後、欧米の表記は epiretinal membrane に統一されました。よって、本疾患の日本語訳としては黄斑上膜が適しており、現在では、一般に黄斑上膜と呼称することが相応しいと考えます。このように歴史のある古くてあたらしい疾患、黄斑上膜を今回は特集として取り上げ、久しぶりに黄斑上膜のあたらしい情報を提供したいと考えています。

今回、黄斑上膜を取り上げる理由のひとつに疾患数の増加があります。OCT 診断の普及した現在、黄斑上膜の疾患数が増加しており、国民の関心も高くなり、実際、日本眼科学会ホームページへの疾患検索のアクセス数も上昇しています。一方、多くの眼科医にとって、黄斑上膜は基礎的な疾患であり、あらためて知識の整理をする動機付けはないと考えている医師も多くいると思います。しかし、最近の黄斑上膜に対する研究の発展は目覚ましく、また治療技術の進歩も数年前とは異なり、より安全で確実なものへと進化してきています。また、私たちの生活スタイルも様変わりし、スマホ、PC、タブレットをいつも手にし、昼夜を問わず視覚情報の強烈なシャワーを浴びていま

す。自ずと、私たちは視覚の質にこだわるようになり、黄斑上膜の初期症状である歪みやものの大きさの不均一を、今まで以上に日常生活において苦痛と感じるようになってきました。

先日、60歳代の女性で有名な写真家の方が、視力が良好であるにもかかわらず、わずかな歪みが気になると言って私の外来を受診しました。無事治療を施し数か月してから、一通の郵便が私のもとに届きました。そこには、京都で開催する個展の招待状が入っていて、一般案内文に黄斑上膜の手術をして芸術家生命が延びたと記載されていました。いまや、黄斑上膜は患者さんの生活の質を大きく損なう疾患であり、我々眼科医は、最新の治療をもってこの疾患に臨む必要があると考えます。

本特集では、黄斑上膜の疫学、黄斑上膜の視機能、黄斑上膜の画像診断、そして手術治療、また続発性黄斑上膜に関して、それぞれの専門家より最新情報をきれいな写真を添えて提供してもらいました。

とてもわかりやすい解説により黄斑上膜の最新情報を得られるようになっていきますので、多くの先生方に一読をお勧めしたいと思います。

\*Kazuaki Kadonosono 横浜市立大学視覚再生外科